昭和四十二年三月

宮崎県文化財調査報告書 第12輯

宮崎県教育委員会

昭和四十二年三月

宮崎県文化財調査報告書 第十二輯

宮崎県教育委員会

えびの町真幸・島之内地下式横穴

栗原文蔵

（一）

遺跡発見の動機は、耕作中平石につき当り取り除いたところ下に空洞があき、のぞき込んでみると人骨等が認められた。この話が地区民の間に広まり、警察の知るところとなり、さらに町教委の適切な処置のもとに県社会教育課に通報があり、昭和四一年八月一〇・一一日緊急調査の運びとなったものである。

（二）

遺跡は、えびの町真幸と加久藤との境に近く、水田に臨む比高一〇メートルあまりの広い台地の北縁に位する。東方三〇〇メートル程の地点に県指定の一号古墳（封土を有する地下式横穴）がある。

遺構の実測図は第一図の如くで、主軸は正しく南北をとる。入口は扁平な割石でふさぎ、竪壙は短い羨道で玄室につながれ、レベルは玄室より一〇～一五センチ高い。玄室の平面は楕円形で、天井はみだれてはいるが屋根形を呈し、これからみると所謂平入となる。ボラ層の下の砂礫層に掘込まれているが、これは他に例をみない。各部の計測値は次の通りである。

全長　二メートル三五センチ、
深さ　（地表より玄室床）一メートル六五センチ、
玄室幅　一メートル九一センチ、
玄室奥行　一メートル三五センチ、
玄室高さ　一メートル五センチ、
竪壙入口　四五センチ×四九センチ。

この地下式横穴の内部は、すでに攪乱されていたが、出土の状況は、羨道部に短甲が直立しており（写真一参照）、玄室の向って左入口に剣、刀子、鉋、鉄斧、鉄鏃などが認められ、右半分には人骨が不自然な形で細片にくだけて散乱し、その間の処々に直孤文のある鹿角製刀装具の破片が散見された。左奥には径四〇センチ前後で、幾重にも黒い薄い幅二センチ程の膜が検出された。縫痕と考えられる孔が列をなして認められるので、皮小板漆塗草摺の漆膜の残存したものと推定され、羨道部から発見された短甲と一体をなしたものであろう。

（三）

出土遺物は、写真二の短甲及び第二図の如くで、短甲は三角板鋲留式と呼ばれる一番進んだ形式で、周縁は革で覆輪をとり、全くの完全である。通常蝶番で胴部を開閉するが、本品にはそれがみられない。高さは前胴部で三一・七センチ、背部で四一・七センチを示す。

第二図1―3は剣で、3には鹿角製刀装具の痕跡をとどめている。4―9は鉄鏃だが、4の様な大型三角形鏃は、地下式横穴にかぎって発見されているようである。10は鉄斧で11は刀子（とうす）、12は鉋（やりがんな）だが柄に骨材をかぶせているのは珍らしい。

（四）

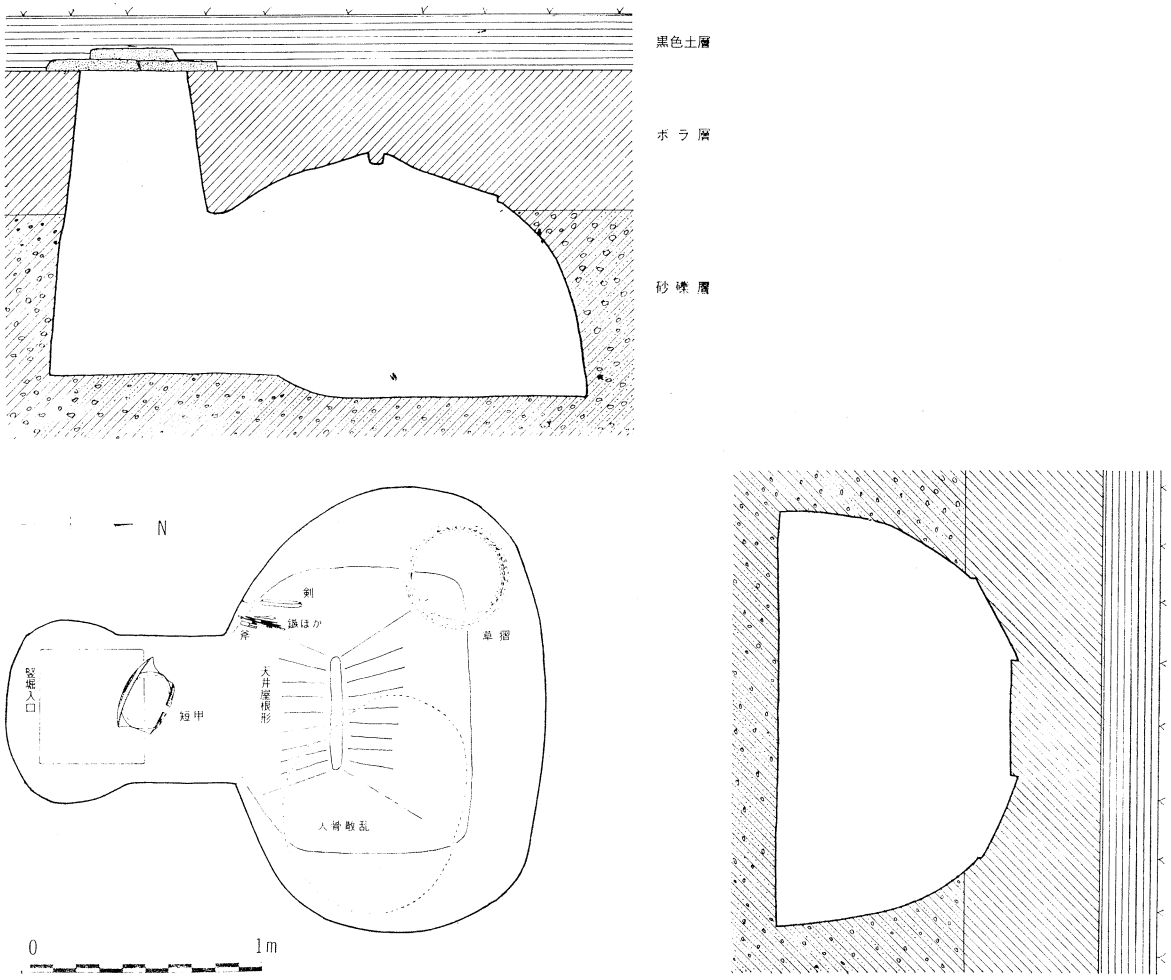
本遺跡の八〇メートル程東方を高圧線が通っているが、その鉄塔工事の折昭和一〇年一基の地下式横穴が発見され、故瀬之口伝九郎氏によって調査されている。真幸支所の記録によれば、写真三、四の如くで、楕円形プランを呈し、玄室入口は割石でふさぎ、人骨三体、馬具、剣、鏃などが発見されている。

また、かって衝角付冑、短甲なども出土したことがあり、現在東京国立博物館に収蔵されている。

宮崎には、多数の地下式横穴の存することは、既に知られている所であるが、とりわけ西諸県地方はその中心の感があり、遺物にも見るべきものが多い。

書紀にみる日本武尊の九州平定の折、日向を通過した経路は、古墳文化伝播の経路と一致するとの見解もあり、延喜式にみる駅制も、古道をうけついだものとすれば、真幸地方は古くから要衝の地であった事が伺われる。

第1図　島之内地下式横穴実測図



第２図　島之内地下式横穴出土遺物実測図

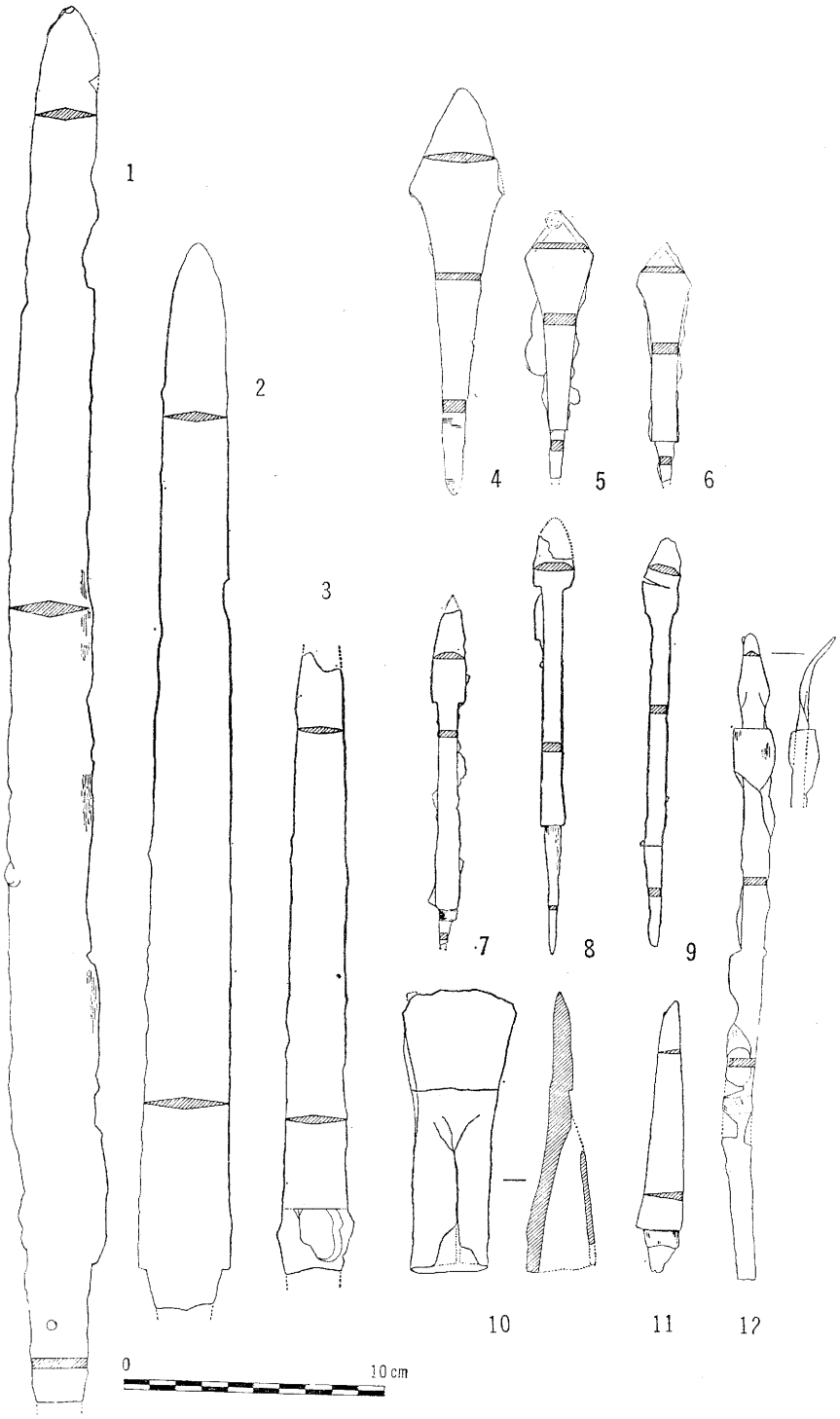
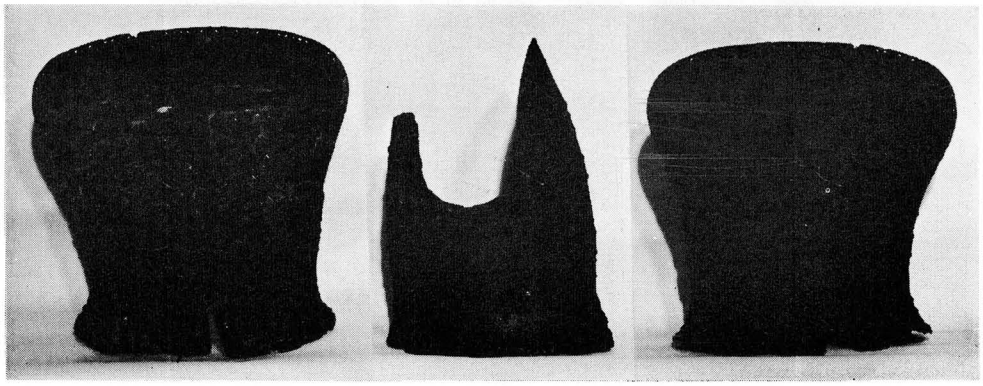


写真１　島之内地下式横穴竪壙入口
短甲の直立しているのが見える



（前）　（横）　（後）

写真２　島之内地下式横穴出土短甲

写真3　昭和一〇年発見地下式横穴

写真4　昭和10年発見遺物

高城町牧ノ原発見の石棺

栗原文蔵

(一)

牧ノ原の台地には、前方後円墳を含む県指定の古墳群があり、すでに名のある所である。この台地一帯が、農業構造改善地域に選ばれ、昨年来その基盤整備工事が進められて来た。町教育委員会でも、指定古墳には標式を立てるなどしてその保護に意を注いでおり、工事に際し、古墳をこわさないこと、工事中何か発見されたら注意することなどを申し入れておいた。工事は着々として進み、昭和四二年二月一七日石棺一が発見され、同二五日さらに又石棺一が、ブルトーザーにより発見された。この報告が二七日教育委員会にもたらされ、翌二月二八日、緊急調査の運びとなったものである。

(二)

牧ノ原の台地は、県指定の古墳群のある所でもあるし、詳しくは述べないが、石棺の発見された場所は、第一〇号古墳の南側一〇メートルあまりと三〇メートルあまりとの二個所で、発見順に前者を1号、後者を2号と呼ぶ。共に地上には標式となる盛り土など認められなかったという。

第1号石棺は、調査に赴いた時には既に痕跡もなかったが、遺された写真(写真一参照)によれば箱式石棺で、遺物は認められず、出土した人骨は古墳に改葬したという。

第2号石棺は、よく保存されており、ブルトーザーで発見された折にとり除かれた一枚の平石の他は、蓋石も完全であった。現場の人達の話を総合すると、石棺の位置は地表下二メートル程になるらしい。

石棺の実測図は、第一図の如くだが、平扁な割石及び平扁な自然石をほぼ二重に囲い、天井は五枚の平石でおゝい、底にも平石を敷きつめ、周囲は粘土で目ばりする。

各部の数値は

長さ(内法)　一メートル八二センチ

幅(内法)　・最大(頭部)四一センチ

〃　(〃)　・最小(脚部)二七センチ

深さ三二センチ—二七センチ

床のレベルはほゞ水平だが、頭部の敷石が石枕様に五センチ程高くなっていたのは注目される。主軸はほぼ南西(N—。50—E)を示す。

石棺内には、人骨一体と右腕と東側壁の間に剣一、鉄鏃三が認められ、頭部東側から竪櫛一が検出された。石棺内には、ほゞ一面に朱が認められ、人骨にも相当量付着していた。

出土遺物は第二図の如くで、1は剣、2〜4は鉄鏃、5は竪櫛で、竪櫛の発掘例は県内では延岡、浄土寺山古墳以来のものである。

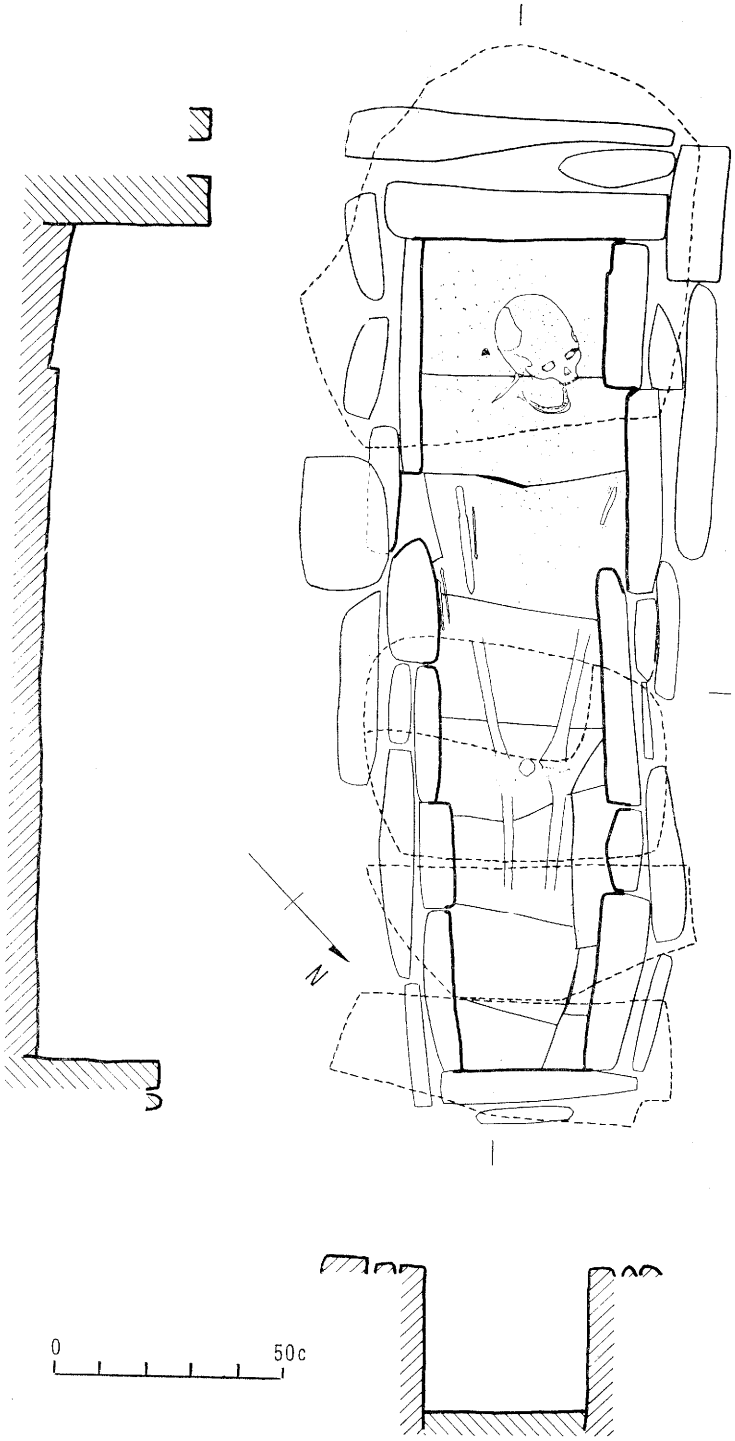
（三）

宮崎の古墳文化は、多くの地下式横穴を持つことによって特徴づけられているが、もう一つの特異性は、横穴式石室が非常に少いことである。数例をかぞえるに過ぎないが、これは将来も変ることがないだろう。これに比して伝統的な箱式石棺は、かなり豊富で管見にのぼっただけでも、十数基をかぞえることが出来る。頭椎柄頭などを出土した串間市の古墳や、背に鈎状凸起を持つ提瓶、丸玉、刀子、須恵坏などを出土した延岡市琴塚のものなどが代表とされよう。

今回発見された牧ノ原の石棺は、中期に副葬される事の多い竪櫛を出土しているので、県内の石棺の中でも比較的年代の遡るものと考えられ、他に極め手となる様な遺物に乏しいが、中期終末ころの所産と考えておこう。

箱式石棺の編年、及び横穴式石室を持つ古墳との関連究明、これらが今後の課題の一とされるであろう。

第１図　牧ノ原発見の箱式石棺実測図



第2図　箱式石棺内出土遺物

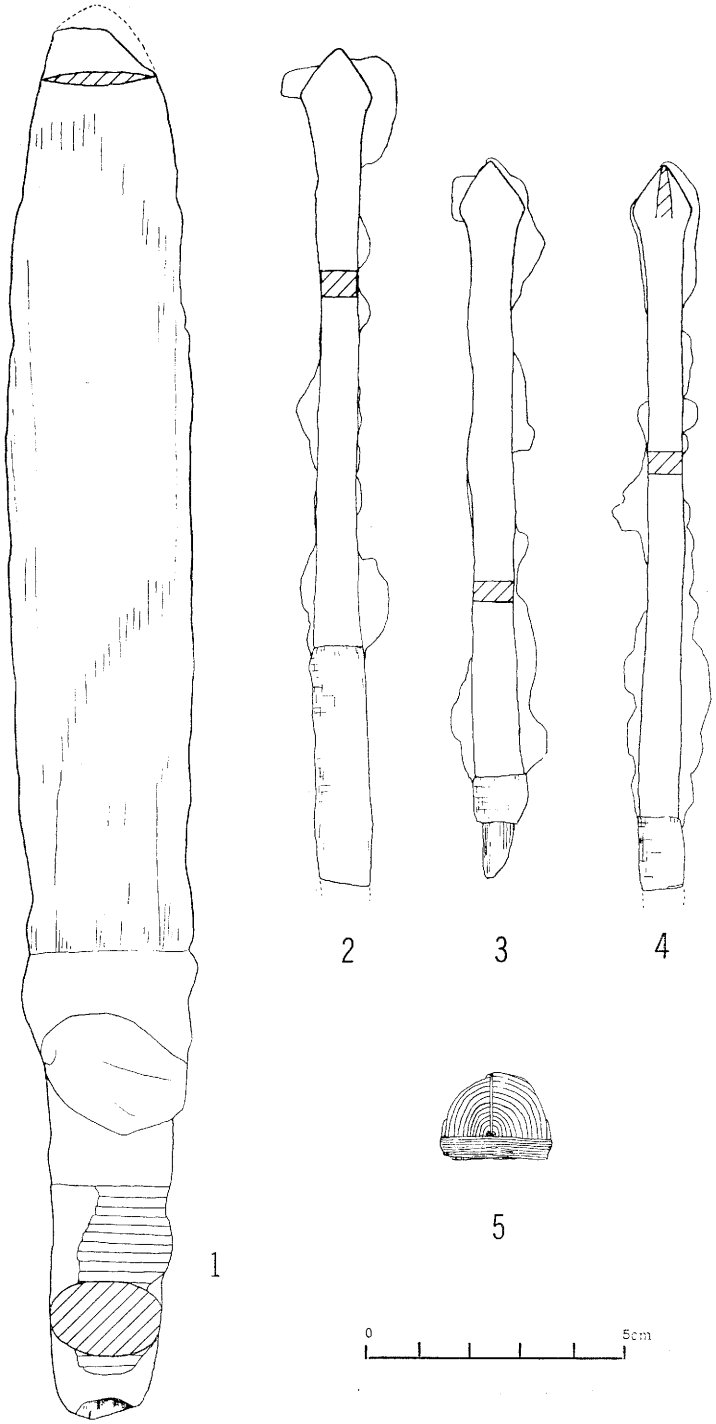


写真1　牧ノ原発見1号箱式石棺

写真2　牧ノ原発見2号箱式石棺

蓋石の状態（右）と蓋石を除いた状況（左）

川南湿原植物群落

平田正一

一、種別　天然記念物
一、所在地　川南町一九四〇三～一九四〇四
一、地目、山林　地積三三六七六平方米
一、現状

この湿原は国立宮崎療養所に隣接する北部から国道一〇号線迄の間に存在する狭少な地積をなしてある。灌漑用水池（七四六九平方米）と、これを周る山地原野および、用水池から東南に広がる山地原野（二六二〇七平方米）からなっている。用水池は四時水をたたえ、夏期はホテイソウの繁茂により、水面の過半を占有される。池中にはタヌキモ、ヒメタヌキモが多い。池辺の沼沢にはクサヨシ群が発達し、その間にミズギボウシ、サワギキョウ、ノハナショウブ、ノカンゾウ、トキソウ、サギソウ等が生じ、陽光の沼沢ではミミカキグサ類、クロタマガヤツリ、ホシクサ等が発生時には著しく目につく。湿原は池辺にも発達するがその主たるものはこの用水池堤防下から国道迄である。

湿原は用水池の放水路および余水吐水路からの水と北部台地の地下水の湧水によって年間通じて湿地となる。旧来開かれた水田の廃田跡がその大部を占めている。湿原を通ずる水路周辺にはサクラバハンノキが特に多く、ヘビノボラズの群生が到る所にある。湿原の植物は四時その種類を変化するが、秋季のホシクサ類の群落はことに美しいものとなる。ヌマガヤ、サワギキョウ、スイラン、ノカンゾウ、ノハナショウブ、ハルリンドウ、ヤマラッキョウ、ミズギボウシ、トキソウ、キンバイザサ等に、モウセンゴケ、コモウセンゴケ、ナガバノイシモチソウ、ミミカキグサ、ホザキノミミカキグサ等の食虫植物が極めて多い。この湿原に続く北部は低平の台地で耕地に続くが、この丘はアカマツと杉の植栽からなり、草原にはカキラン、ノヤマサギソウ、サギソウ、ダイサギソウ、ムカゴトンボ等のラン類が多い。概見してこの湿原は発育の悪い杉林に囲れた湿原とみなされる。

この湿原植物中学術上特に興味のあるものとその群落の特性は以下の様である。

1、湿原に存在する植物種数は別記目録の通りで高等植物八三科二六三種の多きにのぼり、狭小な湿原地としては極めて多数の種数を包蔵している。

2、湿原を特長づける植物はカヤツリグサ科、ホシクサ科、イネ科、ラン科、タヌキモ科、イシモチソウ科で、これらの種属は暖地性のもので その種類数の多いことと、個体群の優れた大きさによりこの湿原植物群落を特長づけている。

3、食虫植物はタヌキモ科およびイシモチソウ科七種におよび、特にナガバノイシモチソウは本州と九州ではこの湿原のみで知られていて分布上重要な因子である。

4、ヘビノボラズは中部地方の西南部と近畿地方に産し、九州では川南地区からのみ知られる稀有植物であるが、本湿原では本種の発達は

極めて良好豊産である。

5、ヒュウガホシクサ　植物和名中「日向」の名を冠した植物は三種のみであるが、これは野村剛氏がこの湿原で初めて発見採集されたものである。大井次三郎博士は最初本植物を新種とされ、その学名を Eriocaulon seticuspe Ohwi とされたが、その後本種の母種は中国南部からインドシナおよびインドに分布することが判明したので、その母種の変種として、学名をE. echinulatum Mart, var.seticuspe Ohwiとされている。

一、由来

この湿原の植物調査を最初に手がけられ、その全貌を明らかにされたのは野村剛氏である。同氏は戦後まもなくこの湿原に隣接して設立された国立病院に入院して加療された。たまたま同病院において療養中の現宮崎大学助教授（教育学部）長沢光男氏を知られた。長沢氏は植物分類に優れた採集家であり、特にスミレの分類では専門家であった。長沢氏は植物分類学に全く未経験の野村氏を懇切に指導され、療養の間の趣味として研究されることを勧められた。野村氏はこれに応えて一歩々々採集知識を向上され、余暇は専らこの湿原の植物を採集研究すること四時におよび熱心な研究者となられた。長沢氏は野村氏を知られて間もなく退院されたが、野村氏は初志を曲げずその調査を続行された。その後著者も長沢氏と野村氏を訪問し、しばしばその研究を激励し、川南湿原の植物構成において比類のないことを知ったのである。野村氏の熱心にして詳細周到な調査により湿原植物の余すところない種類が判明したので、同氏は昭和二五年二月本湿原の植物目録を一応完成された。当時この湿原の天然記念物指定保存の必要を認めたが、戦後の人心混乱による荒廃濫護をおそれる余り久しく温存してきた。近時に至り耕地拡大政策の一端として旧湿原の南部一帯の開田を見、続いて昭和四一年北部一角の牧野開放と湿原の存在に致命的破壊が加ってきたので、急拠天然記念物として指定保存に踏切ったのである。幸にして湿原は川南町有地であったので町当局の温い御協力を得て、学術的に永存することができて感謝する次第である。この湿原の学術的価値を熱心な調査によって裏づけられた野村剛氏および長沢光男氏の御功績を記して将来に飾るものである。

一、保存の要件

この湿原植物群落は既述の如く、その植物構成要素において学術上分布の珍しい点、およびその群落の大さにおいて学術上参考物件として県下にその比類を見ない重要なものである。著者の調査した県内湿原は西都市穂北、日豊線美々津駅東南沼沢地、都農町蒲生および瓜生の二湿原で、これらの湿原においては、群落構成の植物要素とその規模において、川南湿原におよばないのみか、これらの内の大沼沢であった西都市穂北のものは開田により消失し、又美々津沼沢も埋立による宅地造成によって消失してしまった。

本湿原植物群落は国道一〇号線に沿ってあり学術上の利用価値は極めて高い好都合の地理条件下におかれている。将来永く学術上の参考湿原として又暖地性植物の特殊群落として保存されるべきであると考える。

一、参考文献

1、大井次三郎　日本植物誌　一九六五　至文堂

2、Ohwi Jisaburo:Plantae Novae Japonicae, Eriocaulon seticuspe Ohwi sp. nov., Bull. Nat. Soc. Nus. No.34, 1—8. 1954

川南湿原植物目録

○ウラボシ科
シシガシラ、コモチシダ、ベニシダの類、ホラシノブ、ホシダ、イヌワラビ、ハシゴシダ、ワラビ
○ウラジロ科
コシダ、ウラジロ
○カニクサ科
カニクサ
○ゼンマイ科
ゼンマイ
○ヒカゲノカズラ科
ミズスギ
○マツ科
アカマツ
○スギ科
スギ
○ヤナギ科
ネコヤナギ
○シラカンバ科
ウスゲヒロハハンノキ
○ブナ科
クリ
○ニレ科
エノキ
○クワ科
クワクサ
○ビャクダン科
カナビキソウ
○タデ科
ミゾソバ、イヌタデ、オオイヌタデ、イタドリ
○ヤマゴボウ科
ヨウシュヤマゴボウ
○ウマノアシガタ科
ウマノアシガタ、キツネノボタン、センニンソウ、オキナグサ
○アケビ科
アケビ
○メギ科
ヘビノボラズ
○ツヅラ科
カミエビ
○ケシ科
タケニグサ
○イシモチソウ科
ナガバノイシモチソウ、モウセンゴケ、コモウセンゴケ
○ユキノシタ科
ウツギ、マルバウツギ、ウメバチソウ
○バラ科
キンミズヒキ、キジムシロ、ミツバツチグリ、ノイバラ、コバノテリハノイバラ、ナワシロイチゴ、ワレモコウ、ナガボノシロワレモコウ、ナガボノアカワレモコウ
○マメ科
ネムノキ、ヤブマメ、カワラケツメイ、ホソバタヌキマメ、ミソナ

オシ、ヒメノハギ、ノササゲ、コマツナギ、シバハギ、ヤハズソウ、マルバハギ、メドハギ、ハイメドハギ、ネコハギ、イヌハギ、ミヤコグサ、ナツフジ、ヤブツルアズキ、スズメノエンドウ、ヤマフジ

○ミカン科

カラスザンショウ、イヌザンショウ

○ヒメハギ科

ヒメハギ、ヒナノカンザシ

○タカトウダイ科

アカメガシワ

○ウルシ科

ヌルデ、ハゼ

○モチノキ科

ウメモドキ

○ニシキギ科

ツルウメモドキ、コマユミ

○クロウメモドキ科

クマヤナギ、ネコノチチ

○ブドウ科

ツ　タ

○アオギリ科

ノジアオイ

○ツバキ科

ハマヒサカキ

○オトギリソウ科

オトギリソウ、ヒメオトギリ、コケオトギリ、ミズオトギリ

○スミレ科

スミレ、ニオイタチツボスミレ、フモトスミレ、ツボスミレ

○グミ科

アキグミ、ナワシログミ

○ミソハギ科

ミソハギ

○ノボタン科

ヒメノボタン

○アリノトウグサ科

アリノトウグサ

○セリ科

ノダケ、ヤブジラミ、ムカゴニンジン

○イチヤクソウ科

イチヤクソウ

○シャクナゲ科

アセビ、ネヂキ

○サクラソウ科

ヌマトラノオ

○カキ科

カキ（栽）

○モクセイ科

ネズミモチ

○フジウツギ科

ヒメナエ、アイナエ

○リンドウ科

リンドウ、コケリンドウ、ハルリンドウ、フデリンドウ、イヌセンブリ

○ガガイモ科

ヒゴビャクゼン

○ムラサキ科
ハナイバナ
○オドリコソウ科
キランソウ、ヤマハッカ、クルマバナ、ヒメシロネ、ウツボグサ、アキノタムラソウ、
○ゴマノハグサ科
ゴマクサ、サワトウガラシ、ウリクサ
○ハマウツボ科
ナンバンギセル
○タヌキモ科
シロバナミミカキグサ、ミミカキグサ、ホザキノミミカキグサ、コタヌキモ
○キツネノマゴ科
キツネノマゴ
○ヒルガオ科
ハマヒルガオ
○アカネ科
ヤイトバナ
○スイカズラ科
スイカズラ、ガマズミの一種
○オミナエシ科
オミナエシ、オトコヘシ
○ウリ科
キカラスウリ
○キキョウ科
ツリガネニンジン、ミゾカクシ、サワギキョウ
○キク科
ヌマダイコン、ヨモギ、オトコヨモギ、トウコギ、サジガンクビソウ、ノアザミ、タカサブロウ、ヒメムカシヨモギ、アレチノギク、サワヒヨドリ、チチコグサ、ハハコグサ、サワシロギク、スイラン、オグルマ、ミズギク、ニガナ、ハイニガナ、ホソバヨメナ、ホソバアキノゲシ、ヤクシソウ、コウゾリナ、オカオグルマ、タムラソウ、アキノキリンソウ、オニタビラコ
○ミクリ科
ヤマトミクリ
○ヒルムシロ科
オオヒルムシロ、ミズヒキモ、リウノヒゲ
○トチカガミ科
セキショウモ
○タケ科
メダケ
○イネ科
カモジグサ、ケトダシバ、ヒメコバンソウ、ジュズダマ、オガルガヤ、アキメヒシバ、カリマタガヤ、オヒシバ、カゼクサ、ニワホコリ、チガヤ、チゴザサ、カモノハシ、ノギナシアシボソ、ススキ、ヌマガヤ、スズメノヒエ、チカラシバ、アオチカラシバ、クサヨシ、ヨシ、ヌメリグサ、エノコログサ、モロコシガヤ、ネズミノオ、ウシクサ、イトスズメガヤ、ヒメコヌカグサ、トダシバ、ウンヌケモドキ、ヒナザサ
○カヤツリグサ科
カヤツリグサ、ミズハナビ、オニガヤツリ、ヒデリコ、ヤマイ、クロタマガヤツリ、ヒメクグ、ヒンジガヤツリ、カワラスガナ、コイヌノハナヒゲ、イガクサ、コシンジュガヤ、ゴウソ、マネキシンジュガヤ、シカクイ、アンペライ、ヤチカワズスゲ、ヒメイ、タチスゲ、ホ

タルイ、ミクリガヤ
○テンナンショウ科
セキショウ
○ホシクサ科
イヌノヒゲ、ホシクサ、クロホシクサ、ヒロハノイヌノヒゲ、ヒュウガホシクサ、シロイヌノヒゲ
○ツユクサ科
イボクサ、ツユクサ
○ミズアオイ科
コナギ、ミズアオイ
○トウシンソウ科
イ、ホソバノコウガイゼキショウ
○シュロソウ科
ノギラン
○ツルボラン科
ノカンゾウ、ユウスゲ、ミズギボウシ
○ネギ科
ヤマラッキョウ
○ユリ科
アマナ、コオニユリ、ツルボ
○ヤブラン科
ヒメヤブラン
○サルトリイバラ科
サルトリイバラ
○ヒガンバナ科
キンバイザサ、コキンバイザサ
○ヤマノイモ科
ヤマノイモ、カエデドコロ
○アヤメ科
ノハナショウブ
○ラン科
カキラン、ササバラン、ダイサギソウ、サギソウ、ムカゴトンボ、ノヤマサギソウ、コバノトンボソウ、トキソウ、ヤマトキソウ、シロバナトキソウ、ネジバナ

川南湿原植物群